

大学生のカタカナ語の知識・使用状況と 英語学習におけるカタカナ語に対する意識調査

片瀬 紅実子¹
阿久津 純恵²

要 旨

本研究は、カタカナ語が英語学習に与えている影響を検証するために、カタカナ語についての意識調査を行い、その結果を基に、カタカナ語の適切な導入によって英語力を向上させる教育方法の提案を目指した。学習者のカタカナ語使用の傾向やカタカナ語に対する意識を調査するためにアンケートを作成し、学習者の英語力や英語学習へのモチベーションとの関連について分析した。アンケートデータを用いた調査結果から、日本語で使用されている英語由来のカタカナ語に対する認識度は高いが、必ずしも英語力向上に有用であるとは認知されておらず、英語力が高いほど、カタカナ語と英語力の関係性により懐疑的になっている傾向が明らかとなった。

キーワード：カタカナ語、英語教育、アンケート、英語学習、モチベーション

¹ 神田外語大学外国語学部アジア言語学科ベトナム語専攻語学専任講師。

² 東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科准教授。

1. はじめに

1995年より文化庁が継続的に実施している「国語に関する世論調査」では、外来語や外国語などのカタカナ語についての意識も調査対象とされ、認知率・理解率・使用率などが報告されている。この調査において、社会状況の変化に伴い、カタカナ語も「日本語の乱れ」の要因の一つとして考えられている傾向が報告されている（国立国語研究所 2018）。カタカナ語の使用は、日本社会のあらゆる分野で増加傾向にあり、言語使用のみならず、社会活動や経済活動に重要な影響力を持つ現象ともなっている。2020年に改訂・出版された『コンサイスカタカナ語辞典 第5版』では、収録語数が58,500語となり、カタカナ語は現代の新知識や新概念を理解するために不可欠なものとして扱われている。社会活動を支える言語使用において、多くのカタカナ語が進出してきている状況を、カタカナ語の濫用・氾濫と批判的に捉えることもできるが、特に、近年「COVID19」によって引き起こされた世界規模の社会変化の中で、日本語の中に「グローバルパンデミック」、「ソーシャルディスタンス」、「エッセンシャルワーカー」など、新しいカタカナ語が使用され、急速に定着していく様子も観察されている。このように、英語由来のカタカナ語が、共通語として増加していくグローバル社会において、カタカナ語を英語学習に活用する教育方法の検討には意義があるのではないかという着想に至った。

英語教育においては、カタカナ語や和製英語に関して、英語学習者の認知・使用状況や誤用傾向が多く報告されている（河内 2019; Daulton, 2007）。Ishikawa & Rubrecht (2008) は、主にテレビで使用されているカタカナ語を18種類に分類し、日常生活の中で多用されているカタカナ語の数と種類の分析結果から、英語教育に活用する可能性について言及している。Olah (2007) は、英語からカタカナ語として日本語に導入される際の音声の変化及び意味の変化について分類し、カタカナ語を英語スピーキング能力の育成に生かす教育方法とその留意点について示唆している。さらに、望月 (2012) は、カタカナ外来語の学習上の困難点

として、「発音のズレ」、「表記のゆれ」、「意味のズレ」、「和製英語」、「縮約語または短縮語」、「混種語」、「動詞化・ナ形容詞化」、「非外来語のカタカナ表記」、「和語・漢語・外来語の類語」をあげ、カタカナ語が英語学習の弊害となる原因を指摘している。「正しい英語の発音の妨げ」、「英語との意味の違いからの語彙の混乱」、「不正確な文法での使用」など、カタカナ語の負の影響が多く指摘されているが、学生の既知の英語語彙としてカタカナ語を適切に導入することで、学生の語彙力を効率よく向上させる可能性についても、さまざまな教育的取り組みとともに報告されており、英語教育への積極的かつ適切な導入が課題となっているのが現状である。

本稿では、外国語として英語を学ぶ過程にある日本語を母語とする英語学習者が、英語由来のカタカナ語について抱いている意識を考察し、実際の英語教育に応用する教育方法について論じる。本調査においては、「外来語」や「カタカナ語」などの用語に混乱の要素があるため、「カタカナ語」を「英語を起源に持つ外来語でカタカナによって表記される語」と定義した。この調査は、日本語母語話者である大学生英語学習者が、日本語における英語由来のカタカナ語使用についてどのような認知状況にあるか、また英語由来のカタカナ語に対する意識と英語力にはどのような関係性があるか、さらに、日本語母語話者である大学生英語学習者の英語学習において、カタカナ語にはどのような有用性があるかを明らかにすること目的とし、日本語におけるカタカナ語の使用傾向や、英語学習におけるカタカナ語の影響について、リッカート尺度と自由記述を組み合わせたアンケート調査によって 2022 年に実施された。英語学習者の意識および英語力との関係を明らかにすることを試みる中で、特に、英語学習者が日本語の語彙として持っているカタカナ語を、英語教育に活用する有効性について検討した。

2. 研究方法

2. 1 調査方法・調査対象者・調査時期

本学の必修英語科目を受講している一年生107名の学生を対象に、Googleフォームを利用したWebアンケート形式で調査を行った。対象学生の内訳は、インドネシア語専攻29名、タイ語専攻26名、ベトナム語専攻22名、ポルトガル語専攻30名（内、男子学生27名、女子学生76名、無回答4名）であった。調査は2022年5月の第3週から4週にかけて行われた。

2. 2 調査紙の構成

調査対象者の専攻、学年、性別などのフェイスシート項目に加え、国立国語研究所の『外来語に関する意識調査：全国調査, 2』（2005）を参考に以下3つの質問項目を設けた。

2. 2. 1 カタカナ語に関する知識

本調査におけるカタカナ語の定義を提示し、カタカナ語の予備知識を調査するために、対象者のカタカナ語に関する知識を測る質問項目を設けた。日常的に使用されている英語由来のカタカナ語について、それぞれの認知度を問う質問項目の対象としたカタカナ語は、三省堂編修所『コンサイスカタカナ語辞典 第5版』に記載の6語とし、Ishikawa & Rubrecht (2008)によるカタカナ語18分類のうち、*direct borrowings*（クオリティ）、*English loanwords with Japanese morphology*（イメージする）、*abbreviations of compounds*（エアコン）、*tail abbreviations*（サブリ）、*semantic shift*（クレーム、リベンジ）を採用した。回答は5件法（1. 知らない、2. 聞いたことがある、3. 知ってはいるが英語で正しく使えない、4. 英語でほぼ正しく使える、5. 英語で正しく使えると思う）で求めた。

2. 2. 2 英語学習・モチベーション

対象者の英語学習に関するモチベーションと、日常でのカタカナ語の使用やカタカナ語の英語学習への活用にはどのような関係があるかを調べるため、英語学習全般、英語 4 技能、発音について、学習方法や到達目標を問う項目を設けた。質問項目は 10 問で、6 件法（1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる）で回答を求めた。

2. 2. 3 日本語の中のカタカナ語・英語学習におけるカタカナ語

カタカナ語に関する意識や使用状況については、日本語と英語それぞれの質問項目を設けた。「日本語におけるカタカナ語意識」と「英語学習におけるカタカナ語使用」に関して、対象者の認知状況を調べるため、それぞれ 10 問の質問を設け、6 件法（1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる）で回答を求めた。10 問中 3 問については、回答を選択した理由を問う質問を追加し、2 問（「日常生活でカタカナ語はなるべく減らしていくべきだ。」「日常生活でカタカナ語はもっと増やしていくべきだと思う。」）については、選択式（6 択、複数回答可）で、1 問（「カタカナ語は正しい英語を学ぶ妨げになる。」）については自由記述でも回答を求めた。

2. 3 分析方法

アンケート調査結果の分析は、IBM SPSS Statistics 27 を使用し、6 件法を用いた質問項目「英語学習・モチベーション」と「日本語の中のカタカナ語・英語学習におけるカタカナ語」に対する回答について、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。固有値 1 以上を基準とし、因子の解釈可能性を考慮した結果、3 因子解が妥当であると判断し、因子負荷量が、0.30 未満の 10 項目を取

り除き、最終的に残った 20 項目に対して因子数を 3 に指定して、再度探索的因子分析を行った。第一因子は「日常生活でカタカナ語はもっと増やしていくべきである。」「カタカナ語の意味を知っていると英単語を覚えるのが楽になる。」などの項目が高い因子負荷を示していたことから「日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識」と名付けた。第二因子は「カタカナ語をスピーキングで積極的に使っている」といった項目が中心であったため「英語学習におけるカタカナ語使用」と名付けた。第三因子は「わたしは英語が好きだ」「わたしは英語で話せるようになりたい。」などの項目が中であったため、「英語学習に関するモチベーション」と名付けた。内的整合性を検討するため各下位尺度の α 係数を算出したところ、「日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識」で $\alpha=.839$ 、「英語学習におけるカタカナ語使用」で $\alpha=.899$ 、「英語学習に関するモチベーション」で $\alpha=.792$ であり、概ね十分な値であった。各項目の平均値を算出し、「日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識」下位尺度得点 ($M=3.67$, $SD=0.749$)、「英語学習におけるカタカナ語使用」下位尺度得点 ($M=3.26$, $SD=1.024$)、「英語学習に関するモチベーション」下位尺度得点 ($M=4.67$, $SD=0.755$)とした。

3. 分析結果

3. 1 カタカナ語に関する知識

質問項目「カタカナ語に関する知識」に対する回答について、平均値と標準偏差を算出した(表1)。

大学生のカタカナ語の知識・使用状況と
英語学習におけるカタカナ語に対する意識調査

表1 「カタカナ語に関する知識」

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
Q1「クオリティ」は英語で【quality】である。	107	2	5	4.43	0.825
Q2「イメージする」は英語で【imagine】である。	107	3	5	4.41	0.752
Q3「エアコン」は英語で【air-conditioner】である。	107	1	5	4.21	1.158
Q4「サプリ」は英語で【supplement】である。	107	1	5	4.24	1.036
Q5「クレーム」は英語で【claim】ではなく【complaint】である。	107	1	5	2.92	1.448
Q6「リベンジ」は英語で【revenge】ではなく【try again】である。	107	1	5	2.74	1.488

(1. 知らない、2. 聞いたことがある、3. 知ってはいるが英語で正しく使えない、4. 英語でほぼ正しく使える、5. 英語で正しく使えると思う)

3. 2 「日本語・英語におけるカタカナ語意識」「英語学習におけるカタカナ語使用」「英語学習に関するモチベーション」

対象者の「カタカナ語に対する日常の意識」と「英語学習でのカタカナ語使用状況」の関係を調べるために探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）で抽出された三因子「日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識」、「英語学習におけるカタカナ語使用」、「英語学習に関するモチベーション」について、因子を構成する各10項目の下位尺度得点の度数分布は以下の通りである（図1、2、3）。

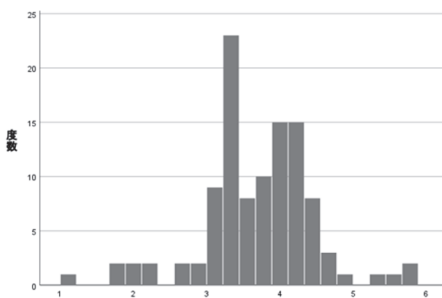


図1 日本語・英語におけるカタカナ語意識

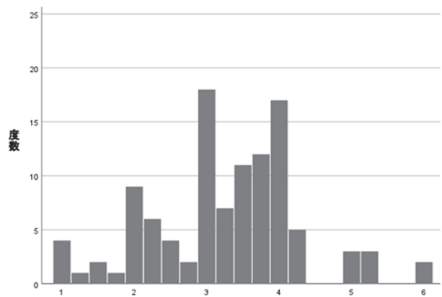


図2 英語学習におけるカタカナ語使用

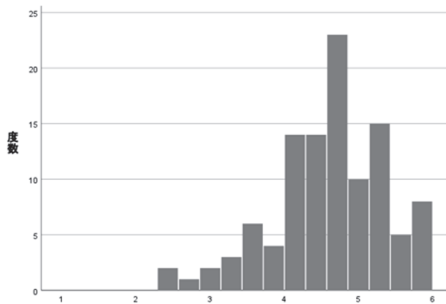


図3 英語学習に関するモチベーション

大学生のカタカナ語の知識・使用状況と
英語学習におけるカタカナ語に対する意識調査

(1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる)

「英語学習におけるカタカナ語使用」の下位尺度得点 ($M=3.26, SD=1.024$) は「日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識」の下位尺度得点 ($M=3.67, SD=0.749$) より平均値が 0.41 ポイント低く、標準偏差は「日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識」よりも 0.275 ポイント高かった。また「日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識」と「英語学習におけるカタカナ語使用」の下位尺度に正の相関 ($r=.443, p<0.01$) があつた。しかしながら、「英語学習に関するモチベーション」 ($M=4.67, SD=0.755$) との相関はいずれも見られなかつた。各因子の下位尺度間相関を表 2 に示す。

表 2 各因子の下位尺度間相関

	日本語・英語に おけるカタカナ語に 対する意識	英語学習に おけるカタカナ語 使用	英語学習に関する モチベーション	M	SD
日本語・英語に おけるカタカナ語に 対する意識	-	.443 **	-.127	3.67	0.75
英語学習における カタカナ語使用		-	-.064	3.26	1.02
英語学習に関する モチベーション			-	4.67	0.76

** $p < .001$

3. 3 英語習熟度および 3 因子の関係

「日本語・英語におけるカタカナ語意識」「英語学習におけるカタカナ語使用」「英語学習に関するモチベーション」と英語力の関係を調べるため、TOEIC Listening & Reading Test スコアで対象者を 3 群に分け、分散分析で各下位尺度得

点を比較した。尚、スコアは、対象者 107 名のうち TOEIC IP テスト（オンライン）未受験の 7 名を除いた 100 名分を用いた。TOEIC スコアの得点分布（ $M=416.0$ 、 $SD=134.507$ ）を図 4 に示す。

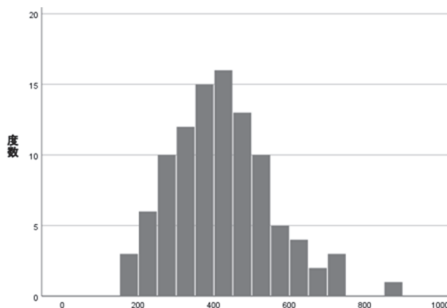


図 4 TOEIC スコア

平均値と標準偏差（ $M=416.0$ 、 $SD=134.507$ ）から、対象者を 3 群（1 群= < 351 、2 群= $351 < 486$ 、3 群= $\Rightarrow 486$ ）に分けて独立変数とし、「日本語・英語におけるカタカナ語意識」、「英語学習におけるカタカナ語使用」、「英語学習に関するモチベーション」を従属変数とした分散分析を行った。各群の平均値は図 5 の通りで、分散分析の結果、群間の得点差は「英語学習に関するモチベーション」のみ 0.5%水準で有意であった（ $F(2, 97) = 4.36, p < .05$ ）。また、Tukey の HSD 法（5%水準）による多重比較を行ったところ、3 群 $>$ 2 群 $>$ 1 群という結果が得られた。

大学生のカタカナ語の知識・使用状況と
英語学習におけるカタカナ語に対する意識調査

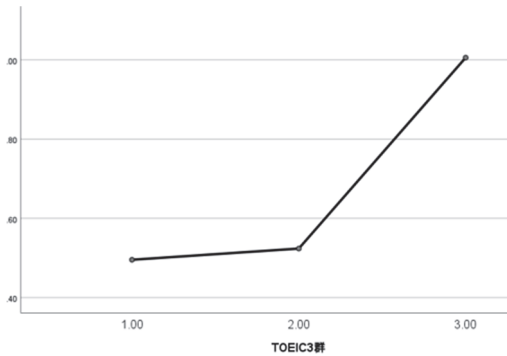


図5 TOEIC 3群の英語学習に関するモチベーション得点

TOEIC スコアと「日本語・英語におけるカタカナ語意識」、「英語学習におけるカタカナ語使用」、「英語学習に関するモチベーション」の相関については、TOEIC スコアと「日本語・英語におけるカタカナ語意識」との間には弱い負の相関 ($r = -.263, p < .01$) が、TOEIC スコアと「英語学習に関するモチベーション」の間には弱い正の相関 ($r = .426, p < .01$) が見られた (表3)。

表3 TOEIC スコアと「日本語・英語におけるカタカナ語意識」「英語学習におけるカタカナ語使用」「英語学習に関するモチベーション」の相関

	TOEIC スコア	日本語・英語における カタカナ語意識	英語学習における カタカナ語使用	英語学習に関する モチベーション
TOEIC スコア	-	-.263 **	-.078	.295 **
日本語・英語における カタカナ語意識		-	.426 **	-.184
英語学習における カタカナ語使用			-	-.163
英語学習に関する モチベーション				-

** $p < .001$

3. 4 「自由記述」

「英語学習におけるカタカナ語使用」に関する設問「カタカナ語は正しい英語を学ぶ妨げになる。」について、回答の理由を自由記述で求めた。6 件法での回答結果 ($M=3.63$ 、 $SD=1.086$) は図 6 の通りである。

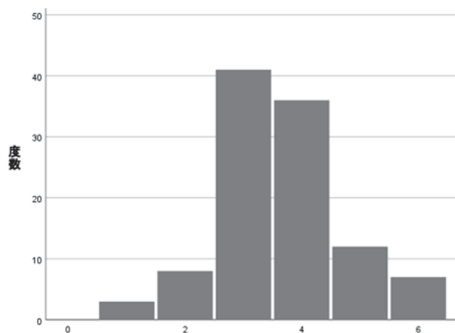


図 6 「カタカナ語は正しい英語を学ぶ妨げになる。」

(1. 全く当てはまらない、2. 当てはまらない、3. やや当てはまらない、4. やや当てはまる、5. 当てはまる、6. 非常に当てはまる)

回答理由についての自由記述については、107名の対象者のうち65名から回答が得られた。回答を KH Coder (樋口 2004) で分析した結果、以下の共起ネットワークが得られた (図 7)。

覚えやすさ（肯定的）＋和製英語との混同（否定的）」と「全般的な覚えやすさ（肯定的）＋「発音と意味の混同（否定的）」と分類され、共起ネットワークから得られた内容が観察された。

4. 考察

本調査では、カタカナ語の認知度について、「イメージする」(English loanwords with Japanese morphology) の認知度が高く(表1)、正しく使用することができていると感じている学習者が多くみられた。実際の教育の現場では、知識としてはカタカナ語の正しい用法を理解していても、実際の使用においては、カタカナ語による形態変化に影響された誤用傾向が多くみられており、学習者自身のカタカナ語認知との乖離が興味深く観察された。また、Semantic shift の2語(クレーム、リベンジ)の認知度が明らかに低いことから(表1)、意味の変異が起こっているカタカナ語については、やはり誤った認知傾向が高いことを指摘することができる。

日常生活におけるカタカナ語の意識に関しては、日常生活でのカタカナ語使用に高い意識を持っている結果とはならず、日常のカタカナ語を意識するほどには、英語学習においては活用されていない、あるいは使用することができていないということが明らかとなった(図1、2)。また、日常でカタカナ語を意識している英語学習者のほうが、英語学習においてカタカナ語を使用する傾向がみられたが(表2)、英語学習に関するモチベーションについては、カタカナ語に関する意識や英語学習における使用傾向との関係性はみられなかった(表3)。

さらに、英語力とカタカナ語意識、英語学習におけるカタカナ語使用の関係については、TOEIC スコアによる差異はない一方で、英語学習に対するモチベーションにおいては相関関係に差が観察されたことから、スコアが高い学習者ほど英語学習のモチベーションは高いが、カタカナ語に対する意識は低い傾向があることが明らかとなった(表3)。

5. まとめ

本稿では、日本語母語話者である大学生を対象に、カタカナ語と英語学習の関係について調査を行い、日本語において使用されているカタカナ語の認知度の高さと英語習熟度について分析した。日本語・英語におけるカタカナ語に対する意識については、学習者がカタカナ語に対して高い意識をもって積極的に使用している結果とはならず、日本語においても、英語においても、さまざまなメディアでカタカナ語が頻度高く使用されている社会状況を反映するようなカタカナ語使用や意識は測定されなかった。また、英語学習におけるカタカナ語についても、その語彙認知や使用状況について、カタカナ語の知識を英語学習に積極的に活用している結果とはならず、カタカナ語の英語教育への導入・活用には潜在的な可能性があることが示唆された。さらに、「英語学習に関するモチベーション」の高さが顕著である今回の学生グループにおいて、英語習熟度とカタカナ語の有用性に対する意識には、弱い負の相関があることが明らかとなり、学習者の言語意識を高める教育方法についても検討の余地があることが明らかとなった。

英語習熟度が高くなるほど、語彙力が高まるため、カタカナ語と対応する英単語の認知が高まり、カタカナ語の有用性に肯定的な意見を持つようになるのではないかと予想していたが、予測と相反する結果から、英語習熟度が高いほど、カタカナ語と英単語の間に存在する差異により敏感になっていることが推測された。このことは、学生の自由記述からも、主に発音・意味・スペルにおける相違点がカタカナ語を否定的に捉える要因となっていることがわかる。しかしながら、学習者自身の記述には、英語学習全般や英語語彙学習に有用な点があることについての言及があり、このことから、英語教育におけるカタカナ語の適切な導入には教育的価値があると考えられることができる。

今回の調査対象学生は、英語以外の言語を専攻する大学生であることから、言語学習に対する関心や意欲が高いと予想される。英語を専攻する学生や言語以外を専攻する学生などの調査を行い、グループ間の類似点や相違点を観察すること

で、より詳細なカタカナ語への意識を比較・分析することが検討課題である。また、英語習熟度との関連について、より詳細な分析を行うために、学習者の産出する英語スピーキング・ライティングデータを用いた分析が課題である。本調査において、カタカナ語の有用性に着眼したアプローチには、日本語を母語とする英語学習者の英語力養成のために、日本語と英語の言語・文化的差異を意識させる教育方法として、英語学習者の潜在的能力を伸ばす教育的価値があることが示唆された。この調査結果をもとに、カタカナ語を意識させる教材を作成し、実際の教育実践に取り組み、学習者の英語力への影響を継続的に測定していく計画である。日本語母語話者である大学生英語学習者の高いカタカナ語認知度を活かし、汎用性の高い英語教育的アプローチの一つとして、カタカナ語を活用した具体的指導方法の提案が今後の課題である。

参考文献

- 河内千栄子 (2019) 「大学生の外来語意識：外来語親密度や英語語彙サイズとの関係」『久留米大学外国語教育研究所紀要』第 26 号 47-62.
- 国立国語研究所 (2005) 『外来語に関する意識調査：全国調査, 2』国立国語研究所.
- 国立国語研究所 (2018) 『平成 30 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要』国立国語研究所.
- 三省堂編修所 (2020) 『コンサイスカタカナ語辞典 第 5 版』三省堂.
- 樋口耕一 (2004) 「テキスト型データの計量的分析—2 つのアプローチの峻別と統合—」『理論と方法』(数理社会学会) 19 (1) : 101-115.
- 望月通子 (2012) 「基本語化を考慮したカタカナ外来語の学習と教材開発—その振り返りと新たな開発に向けて—」『関西大学外国語学部紀要』第 6 号 1-16.
- Daulton, F. (2007). *Japan's Built-in Lexicon of English-Based Loanwords*. Clevedon, UK: Multilingual Matters

大学生のカタカナ語の知識・使用状況と
英語学習におけるカタカナ語に対する意識調査

- Ishikawa, K., & Rubrecht, B. (2008). English loanword use on Japanese television. *In JALT Conference Proceedings 2007*:307-316.
- Olah, B. (2007). English Loanwords in Japanese: Effects, Attitudes and Usage as a Means of Improving Spoken English Ability. 文京学院大学人間学部研究紀要 9(1), 177-188.